

平和文化研究 第38集 (2018年)

聞き書き 小笠原正己の戦前・戦後

～戦後直後の長崎医科大学と草創期の長崎ABC～

木永 勝也

Cover Artwork: Seiryō Ikawa

長崎総合科学大学
長崎平和文化研究所

聞き書き 小笠原正己の戦前・戦後

～戦後直後の長崎医科大学と草創期の長崎ABCC～

木永 勝也

概要

本稿は、戦後直後に長崎医科大学に勤務していた小笠原正己氏への聞き取り調査をまとめたものであり、活動実態などが不透明であった草創期の長崎ABCCについて考察した。そのなかでABCCあるいは占領軍と医科大学との密接な関係を例示したものである。

内容

はじめに	53
第1部：聞き書き記録	
1. 佐世保時代—少年期・医科大学時代	
2. 医科大学卒業後の軍医時代	
3. 医科大学勤務とABCC	
4. 開業とその後	
第2部：長崎ABCCを巡る若干の検討—医科大学との関係など	
(1) 長崎ABCCの活動内容	
(2) 長崎ABCCと長崎医科大学	
(3) 長崎ABCCの施設や拠点について	
おわりにかえて～今後の課題	
注	65
参考文献	69

はじめに

戦後直後・占領期のいわゆる「空白の10年」に属する時期、被爆者の自主的組織が形成される1950年代半ばまでの状況については、研究は進展してきてはいるが、未だ十分に明らかにされていないわけではない。それは戦後初期の原爆被害の状況把握、原爆調査についても同様である。筆者は、かつて、原爆傷害調査委員会（Atomic Bomb Casualty Commission）で長崎（以下、長崎ABCC

と称す）に連絡員として勤務していた藤田芳子氏に当時の経験などを聞き取り調査をする機会があり、その内容をまとめた。『平和文化研究』33集（2012年）に掲載した「聞き書き 藤田芳子の戦前・戦後」であり、「補論：長崎ABCCの紹介と若干の考察」として、組織人員や機構など基礎的な事項の整理検討も行った。この聞き書きは、ABCCが本格的に稼働し始めた1950年代以降が中心であり、戦後直後・占領期についてはかなら

ずしも十分な情報が得られた訳ではなかった。また、医師など医療関係者や調査員（事務職に位置づけられていた）方への調査の必要性も残された課題となった。

その不足分を補いたいとの考えから、本稿の前半は、戦後直後に長崎医科大学に勤務していた小笠原正己（おがさわら まさみ）氏に聞き取りを行い、長崎のABC Cを中心にお話いただいたものを再構成したものである^{注1}。第1回を2018年1月26日（金）に、第2回を2018年3月2日（金）に、長崎市内のご自宅にて、小笠原正己氏とひろみ夫人にも同席・援助いただきながら実施した。本稿の後半は、聞き書き記録の解説的な文章である。聞き書きの位置づけ、解説ということで、長崎での戦後直後からの原爆被害調査、ABC Cの調査活動などについて若干の考察を加えておく。

あらかじめ証言・記録として小笠原氏の話の位置づけを指摘しておけば、長崎での戦後初期の米軍の原爆調査と長崎医科大学の協力的関係が確認できること、初期の長崎ABC Cについて、新興善小学校とは異なる場所（旧長崎税関）が活動拠点であったことなど活動の一端がわかる、ということにある。さらにABC Cに関わる事項だけでなく、大学史という角度からみても、戦後直後の医科大学の状況についての証言として、貴重な意義があろう。

第1部：聞き書き記録

1. 佐世保時代－少年期・医科大学時代

－：小笠原様については、昨年2016年年度のNHKの番組、E T V特集^{注2}で知りまして、なにぶん連絡先もわからず、機会があればお話をお伺いしたいと思っておりました。今回はありがとうございます。

－：まず簡単な略歴から教えていただければ。お生まれは？

小笠原：生年月日は大正9年（1920年）4月1日生まれ。佐世保市の元町、明治から続く小笠原薬

局^{注3}の1人息子、ばか息子（笑）でうまれて、大久保小に行って、佐世保中学にいて、佐世保中学から薬専にいきました。

－：薬専の方ですか？

小笠原：薬専、その頃は長崎医科大学附属薬学専門部、今は長崎大学薬学部。浦上天主堂の脇がグラウンド、そのすぐ脇に薬専があって、そこに3年間いった。昭和13年から16年3月まで。

－：昭和16年だと、まだ短縮になっていない時期ですね。

小笠原：そう。

－：医専（臨時医学専門部）の方にはいかれなかったんですね。

小笠原：その後、いきさつをいわないかんですが。身内に医者をやっているのがおって、親父がうらやましがって。やはり頑張って医者になれと。その頃は医学部に志望者がすくなくて、いわゆる「傍系」なんです。旧制高校にいったらんですから。

－：昔、「正系」と「傍系」といっていた、「傍系」ですね。

小笠原：そう。旧制の高校を終えたらんというのが、一生のこるコンプレックスでね。

－：「傍系」の方は、同級生のうち何人くらいでしたか。

小笠原：同級生七〇人のうち、三人。

－：他大学の例ですが差別されたといった経験もお聞きすることがあるのですが、いかがでしたか？

小笠原：先生からいじめられた。だから意地になって勉強したね。

－：薬専を出てから、医科大ですか。

小笠原：いや。1年間薬剤師をしとった。（自宅の）近くにあった簡易保険の健康相談所^{注4}に勤務した。家は元町ですが、上町にあった。そこで薬剤師勤務をしながら、勉強して。昭和17年4月に医科大に入学。

－：卒業は？

小笠原：まる3年間で、短縮卒業（昭和20年3月）。夏休みなしです。

－：それはきついですね。

小笠原：きびしかった。浦上の方でこそっと飲み屋にいて、かえりは角帽隠しながら。駅前交番のところ、前を。飲んで学生が何だかといわれるから。麻雀しよってね。警察に通報されて始末書かいたことがあった。空襲警報がなってもしよって近所の人から通報されて（夫人：夜中音がして、灯りがもれたりしたらわかりますよね）。

－：卒業後は（昭和20年4月からは）？

小笠原：僕は陸軍は大嫌いやけん。軍医学校に合格しました。横浜の海軍軍医学校^{注5}に入校しました。

前後しますけど、親父^{注6}は佐世保空襲で死にました。その親父が、アメリカとの戦争が始まっちゃりましたから、アメリカは捕虜を殺さんけん、捕虜になっても生きて帰ってくれ、というのが親父の最後のはなむけの言葉で。佐世保駅での。

－：お父さん、お母さんとも、ご家族を佐世保空襲でなくされたんですか。

小笠原：20年の6月29日の佐世保空襲で、家と家族は焼けてしもうた。親父だけで、独身でしたから。親父は女房がなくなって再婚しとりませんでした。

－：ご兄弟は？

小笠原：私は1人息子で。母が離婚して私を実家に（小笠原に）連れて戻って。私は父の養子になり、昭和11年から小笠原正己になった。

－：佐世保中学の同級生とか、おつきあいのある方とかは？

小笠原：ぜんぜんおりません。みんな、。

（夫人と小笠原氏のやりとりで）一番最後までつきあいがあったのが弟子丸さんで。佐世保市議員だった。弟子丸くんは商業に行ったですね。上町の弟子丸。佐世保中だったのだと、しきた（漢字表記不明一筆者）とか。東大に行って、どっかの教

授になったけどね。



写真1 小笠原氏（中学1年生時）^{注7}

小笠原：この写真が中学1年生。（よく残ってますね一筆者）200人で5番（の成績）で入ったので、はじめて級長ばさせられた。先生から、おまえ声がチャボのごたるね、といわれて。その先生からいわれて。とうとう中学6年間、あだ名になってしまいました（笑）。

－：医科大に入ってから、長崎にずっとお住まいですか。

小笠原：いやー、二週間にいっぺんは佐世保に帰り（薬剤師としての）仕事をしてた。東（あづま）薬局に仕入れにいかないかんし。自転車でゆらゆらするくらい薬ばつんで、仕入れて相浦あたりへも運んでというのが仕事やった。そのころは浦上から佐世保まで三時間かかりよった。

－：東薬局というのは？

小笠原：佐世保玉屋のすぐ近くにあった。同級生の、東雄一郎がやっていた。亡くなりましたけど。薬の仕入れに行っていた。学生時代に、親父の面倒と薬の仕入れに佐世保に帰っていました。

－：薬局を半分手伝いながら、医科大学に行っていたということですか。たいへんですね。

小笠原：帰るとき、汽車が石炭のたらんで、大浦で止まる、本河内のトンネルで止まるとか。（夫人一バックしよったそうですから）。いつでも降りら

れるようにしとかないと、とか。

2. 医科大学卒業後の軍医時代

－：短縮卒業後、横浜にいてから、お父様が亡くなられた？

小笠原：いや、横浜で元気に頑張ってこいというのが3月で。その後6月29日佐世保空襲で親父はなくなったわけです。佐世保にお墓があるもんだから。八幡町の西方寺に。

－：帰られたんですか。

小笠原：いや、横浜の軍医学校から岩国海軍病院に転勤になって、佐世保の空襲で親父がなくなったということをそこで聞きました。海軍病院のときの軍人の姿がこれです。



写真2：海軍見習尉官時代

－：このとき、階級は？

小笠原：海軍軍医見習尉官になった。少尉の下です。軍人を3年すればというが、佐世保市役所では記録がありませんと言われたりした。

－：じゃあ、昭和20年の、原爆のときには長崎にはおられなかったんですね。

小笠原：岩国海軍病院にいました。広島の被爆者の治療にあたりました。おまえたちは医者じゃなかばってん、手伝いせろ、といわれて。

－：広島に行かれたんですか。

小笠原：いや、広島からきた被爆者を病院で治療したということです。治療したということで、原爆手帳^{注8}ばもらうことになったわけです。いまは四種類まであるけど、三号の手帳。

平成10年に同窓会があつてね。病院は岩国国立療養所というところになつてゐるんですが。その売店のおばさんに、あんときの軍医さんやつたよね、大変やつたもんねーと話されて。私は原爆手帳をもらったけど、あんたは持つとるね、と聞かれて。そういうことになつてゐるんだと、初めて。教えてもらつて。

家内のは昭和と書いてあるけど。私は平成でしょ、その時に3号の手帳を持った、それで番号も広島ナンバーになつてゐるわけです。

－：8月に岩国から長崎・佐世保に帰られたんですか。

小笠原：いや、1週間休暇をもらいました。親父の骨を拾いに、ということで。墓参りしてこい、ということで軍医長から許可をもらつて。ちょうど終戦の放送は汽車のなかで聞きました。

－：岩国からはどちらに？

小笠原：門司の海軍武官府^{注9}。そこに居場所もらつて、(昭和)20年いっぱいおりましたね。それから、家はないし、親戚の佐世保のいとこのところに居候しました。佐世保の木場田町の、芳賀(はが)医院というのがあつて、いとこがやつていたから。

3. 医科大学勤務とABCC

－：長崎へは？

小笠原：これじゃいかんと思つて、勉強せにゃいかんと思つて長崎に移転しました、昭和21年に。長崎の銀行から電車通りのいくところに、吉原という薬局があつたが、そこが親戚で。そこに居候しながら大学病院に通うようになった。浜口の(大学病院)は使い物にならなかつたから、新興善小学校にかようようになったわけです。

－：それで。

小笠原：新興善小学校に長崎医科大学があり、横田内科に入った。横田内科、影浦内科というのがあつて、横田内科の副手になった。助手、副手、副手補てね、その副手ですね。今でいう第一内科、第

二内科、横田内科が今の第一内科、影浦内科が今の第二内科です^{注10}。

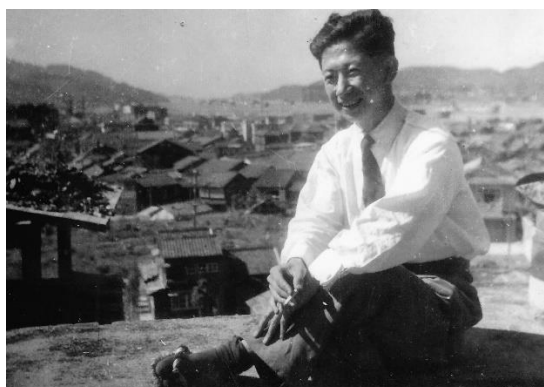


写真3:医科大学時代

(新興善小学校の屋上で撮影した写真で、奥に見えるのが、長崎港の女神の方向—現在女神大橋がある—)

—：今で言う、その第一内科でのご専門は？どのあたりを扱うのでしょうか？

小笠原：いや、内科全般です。そのうち、第三内科ができて、循環器内科になる。そのころは横田内科と影浦内科は、何でも。何でも屋ということで。

—：少し、当時の医科大の先生たちのことを少しお聞きしたいのですが。

学生時代には角尾(普)学長になったことは？

小笠原：なろうた。プライドの高っかもん。小児科の教授とかね、階段教室でこうおりてきてにらみながらね。厳しかった。(角尾先生は)マナーに厳しく、(授業をうける態度とか)やかましかった。

—：内科では横田先生に師事されたんでしょうか。

小笠原：いや、僕がなろうたのは、角尾さんと影浦さん。勤める内科が横田内科ということ。僕が入ったもんで給与のある人が下に下げられて、無給になってしもうた。ごめんなさいということですよ。

—：影浦先生ってどういう先生だったんですか。

小笠原：この人は角尾先生とちがって、おとなしい、ぜんぜん違う。やさしい先生だった。

—：学生時代には、永井隆さんとかにも？

小笠原：放射線科、レントゲンのね。助教授のままで。階級章は外して軍服の上に白衣来て講義していた、階級章ば外したね。(夫人：国民服だったかもしれないのでは?) 講義は、あまり上手ではなかった。

—ABC Cにつとめるのは？

小笠原：新興善小学校で、横田教授にね、声かけられて。ごめんなさいね。自慢にもなるかもしれないけど。子どもの頃から英語が好きで、大好きで。弁論大会でも英語で。(Twinkle, Twinkle, Little Starの歌詞をそらんじて) まだ覚えとる。

—：英語が得意だったという、それでABC Cに行かないかと、..

小笠原：そうそう。おまえ、ある程度通訳もしきるようだから、行けということ。横田教授からの命令で。横田内科から3人、影浦内科から3人、6人がABC Cに行った。そのうち、僕だけ生きとる、ということです。

—：ABC Cに行けて、言われたのはいつ頃ですか。つとめはじめてしばらくしてからですか？

小笠原：うーん、時間的な記憶はないなあ。

—：当時のABC Cは、新興善小学校のなかにおかれていたと書かれているものもあるんですが。6人で行っていたときは新興善の中にあっただけでしょうか。

小笠原：いや、僕が行きよる頃は、下まで行きよったですよ。まだ。中にはなかった。出島の税関にあった。新興善小学校から歩いて、ABC Cの仕事が終わったら、大学の医局に戻りよったですよ。

—：長崎の税関がアメリカ軍に接収されていましたが。そこにおかれていたんですか。

小笠原：そう。

—：出島税関のABC Cが新中川町(諏訪神社近く、もとの教育会館の建物)に移った時には？

小笠原：いやもう関係なかった。ここに来たばいね、とって見てはいました。川ばたの方にも玄

関かな、あって。その時はもう僕は八幡町で開業するころで。八幡町の神社の鳥居の近くで開業します。

－：開業は？

小笠原：昭和27年ですね（これは記憶違いで、おそらく1949年（昭和24年）中である）^{注11}

－：出島の税関にABCCがあったときには、車は？。モータープール（駐車場）は？

小笠原：税関のところに車もあった。運転手もいて、ジープに乗って採血して回って。ジープにのつとる写真があったが、...



写真4：ジープにのつた小笠原氏など^{注12}

－：最初のころのABCCの仕事というのはよくわかりませんが。NHKの特集内では、採血やケロイドの写真撮影を命じられたといわれていますが。

小笠原：軍医がおって、シールズ・ウオーレンという軍医長。名前も覚えとる。

－：長崎の責任者ですよね。その人の指示で毎日そういう仕事をされるんですか。

小笠原：自宅までジープに乗っていきましたよ。一番遠くは長与あたりまで。

－：だれか一緒にいきました？看護婦さんとか？

小笠原：いやいや、大体、軍医、医者やろうね、軍医が運転して、あとは私だけんごたったですね。

－：採血を持って帰ってからは？。

小笠原：持って帰って、そこから先は、我々には何もさせてくれん、治療は全くしない。

－：ABCCでジープに乗って家を回って採血にいかれますよね、それは毎日、されてたんですか。

小笠原：出島の税関の所に来る人にはそこで。（税関に）来た人ばみよるのが多い。いやがって採血にきたがらん人の場合はたずねていく。

－：医科大から行った人は6人いらっしやいましたが、毎日行ったんですか。交代でとかは？。仕事しては完全に移ったかたちだったんでしょうか。

小笠原：みんな、毎日行きよったですね。

－：午前中だけで、午後は医科大でということとは？

小笠原：いや、夕方までだった。新興善から歩いておいて、仕事が終わったら上にあがって。おそろしがっていやといって断る人のところには、長与までジープで行って。呼び出しても来んからということ。

－：ABCCに来る人、尋ねて行く人とかは、どういう人が来ているかはわかっているんですか。

小笠原：いや、わからん。

－：撮影した写真、採血をした人の調査票とか自分たちで（自由に）みることはできるんでしょうか。

小笠原：いや。採血だけ。治療はまったくしない。

－：治療はしないということに、来た人から直接文句はいわれなかったですか？

小笠原：いや、我々にはいわんかったね。

－：（ケロイドの）写真をとるとか、検査とか、ウオーレンさんの指示で仕事をされたんですか？

小笠原：いや、ぼくは採血だけで。もちろんケロイドの診察はしましたよ。この写真は許しを得てとったんです。写真をとるとかはあまりせんかった。



写真6：ABCCにて^{注13}

—：ところで1950年代の名簿で小笠原さんの名前がないのですが。ABCCのなかのセクション、所属というか部署とかはどうでしょうか？内科というのではないので。

小笠原：うーん、わからない。

(夫人：今回の手紙でわかったのですが、じゃあ僕はABCCの職員じゃなくて、大学からただただ行かされてたんだらうかって、話してたんです)

—：そのあたりがわからなくて。1950年代のABCCが移るころの名簿しかないので、もうおやめになっていたからってということも考えられるのですが。

小笠原：うーん。(夫人：じゃあ、僕の給料はどこから出ていたんだらうか、とかっていうことも言っていたんですよ)。

—：横田内科とか影浦内科とかから、ABCCと一緒にいられた人^{注14}とか、記憶にありますか？先輩の人が一緒にいった人とか。

小笠原：小柳くんが、大浦あたりの。古閑さんとか。(夫人とのやりとりや第一内科「同門会」の名簿を見ながら、医科大学の同級生の何名かの名前を読み上げながら) うーん、ちょっと、、、。(夫人とのやりとりのなかで) 高野九州男さん、写真にうつとる。学校は違うけど専門部か。あと、大坪淳二、丸山で開業しとった(福佐屋のちかく)。

—：内科だと、土山(秀夫)先生^{注15}とかは直接の関係とかはないですよ。ずいぶん下ですし、ABCC名簿にはあるのですが。

小笠原：そう。一緒になったこととかはないな。

(夫人—5つくらい下の学年でしょうか)

—：シールズ・ウオーレン氏は(写真の中央の)この方でしょうか？



写真7：ABCC関係者(旧長崎税関屋上にて)

小笠原：たぶん、、、。当時、五〇代くらい。ハーバート医科大卒とか。病理学の原書をももらったけど、なくなってしもうた。

—：ABCCに勤めていたときウオーレン氏以外はどうかだったでしょうか？アメリカ人の医師とかは何人くらい？

小笠原：ウオーレン氏のほかに陸軍医と海軍医とがいて、軍医が三人いたと思う。

—：軍医の方とは、英語で話すんですか。

小笠原：通訳でね、ある程度のことはわかった。また、いろいろお手伝いする人がいて。岡田さん、大浦の岡田医院のお嬢さんとか、沢山商会のお嬢さんがいて。二人とも活水(女学校)出身で。

—：沢山商会のお嬢さんとか、以前にも(藤田氏の聞き書きをした際)言われてました。英語ができたんでしょうね。ABCCのなかでは普通は日本語ですか。

小笠原：日本語ですね。(英語は)軍医さんたちと話をするときだけ。

—：軍医さんたちは、ご家族で来ていたのでしょうか。

小笠原：いや知らない。つきあいもないので、よ

う知らんですね。

一：日本人の医者の方は？6人以外に医科大学から派遣されていた人とかいたんでしょうか。外科の方とかは？

小笠原：いや、おらんはずですよ。そこはしりません。内科の我々だけだったようです。

一：出島の長崎の税関の中ではどこに？

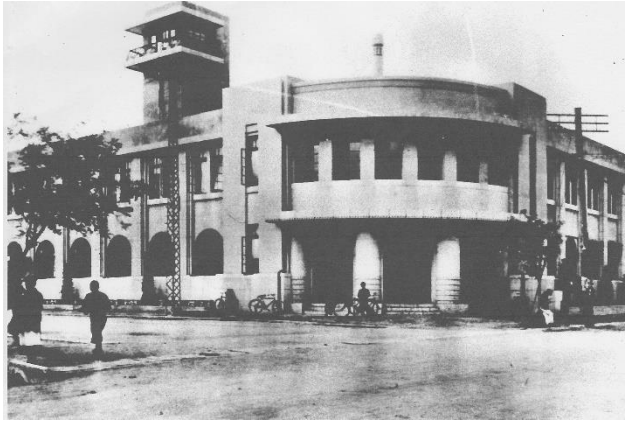


写真8：旧長崎税関

（戦前期の写真、米軍資料より）

小笠原：税関の二階だったように記憶しとる。

一：なかに部屋があって、分かれて？

小笠原：部屋というか間仕切りもなんもなくて。広いところに何もなくて。

一：出島の税関の他の階は？、他にはどのような施設が？

小笠原：わかりませんねー。



写真9：ABCCの写真

（なお、新興善小学校内の可能性も高い^{注16}）

一：机、いすがあって、顕微鏡とかがあってと
いった施設だったんですね。

小笠原：天井が高くてね。寒うしてね。

一：あの、給与とかは？

小笠原：給与はABCCでもらわんで、大学の医局でもらっていた。

一：医局でですか。給与はよかったですか？

小笠原：医科大の副手なので、給与は良かったと思う。助手—副手—副手補—無職ね、という順だから。さっきもいうたけど、僕が入ったもんで無給になってしもうた人が出て。ごめんなさいというこで。

一：当時の副手の人の給料ってどれくらいだったんでしょうか。現金払いですよ。ABCCとかから出ていたのでしょうか、

小笠原：おぼえとらん。どこから出ていたかはしらない。

一：仕事が終わってからはどうされてました？。占領軍の関係では、浜の町にアメリカ文化センターとか、ダンスホールとかもありましたが、遊びにいかなかったですか。

小笠原：ダンスが好きでね、よくいった。ルンバでもタンゴでもワルツでも。タンゴが一番好きね（笑）。

一：アメリカ人の人もいて？若い男性、女性いて。ABCCに行っていたところですよ。

小笠原：そう。医局長から怒られた。白鬚さん（白鬚医院の現在の院長の祖父—夫人より）が医局長で。うわさによれば、おまえ、ダンスホールばかり行きよるという評判だつて。医局員があんなはでなところにいりびたつとるといって（笑）。

4. 開業とその後

一：ABCCをやめられたあと、八幡町で開業されているわけですが、開業医とABCCとの関係とかはどうだったんでしょうか。剖検、解剖の件とか。

小笠原：僕の場合、何の関係もなかった。まったくなかった。

－：被爆者の人の剖検とかの関係でなくなると連絡先があってそこに連絡が行ってとかという話もあるのですが。

小笠原：連絡する先とかもなかった。

－：やはり、ABC Cと関係があるようなのは大学の先生ですか。

小笠原：そうだと。

－：医科大学との関係はどうでしょうか。研修とかたまに行かれることとかあったんでしょうか。

小笠原：開業してからはいかに、そげん暇はなかった。学校医ばいくつかさせられたし。新興善、玉園、活水、医師会、長崎中学とか。学校医を50年やって、それで勲章ももらいました^{注17}。

－：学校医をしていると、被爆したことのある子どもや被爆者の子どもとかいましたよね。そういう場合、わかるもんですか？

小笠原：：そんなことはわからないですね。(夫人：学校の方ではわかっていたんでしょうけどね、)

－：学校医をしているとケロイドとかあったりした場合、カルテというか記録とかには書くもんなんでしょうか。

小笠原：：いや、なかったですな。

第2部：長崎ABC Cを巡る若干の検討

一医科大学との関係など

(1) 長崎ABC Cの活動内容

ABCCを改組した放射線影響研究所の『10年のあゆみ』(昭和60年、1985年)での記載では、長崎ABC Cの活動は、1948年7月からとされている。そうであれば、小笠原氏がABC Cに関わった時期はきわめて短い期間とせざるを得ない。しかし、戦後初期の原爆調査全体の進展のなかで、長崎医科大学が協力した原爆調査や研究活動に従事していたと考えれば、時期的には多少広がる。小笠原氏が旧長崎税関に通っていた時期がいつか

らは明確にはできないが、最も長くとれば医科大学に勤務し始めた1946年(昭和21年)春からABC Cが移転する前の1949年末までの間となる。

1945年(昭和20年)9月、トーマス・ファレル准将らが率いるマンハッタン管区調査団、オーターソン陸軍大佐の米国太平洋陸軍総司令部軍医団、シールズ・ウォーレン(Shields Warren)海軍大佐の米国海軍軍医団が合同して、広島および長崎の原爆被害を調査した。その後、マンハッタン管区調査団および軍医団と日本側調査団(都築正男東京帝大教授がその中心である)により、いわゆる日米合同調査団が結成され調査を継続することになる。長崎では、九州帝国大学・長崎医科大学・大村海軍病院が協力している。

この日米合同調査団に続くものがABC Cであり、1946年(昭和21年)10月、オースチン・ブルース博士、ポール・ヘンショウ博士(Paul S.Henshaw)、メルビン・ブロック陸軍衛生科中尉(Melvin A. Block)、ジェームス・ニール陸軍衛生科中尉(James V. Neel)の4人が任命されて暫定組織として発足した。この当初メンバーにフレデリック・ウルリック海軍衛生科中尉(Frederick W. Ullrich)を加え、計5名で組織された。その後、調査団は、11月25日東京に到着したころ、ABC Cは常設機関として正式なものとなっていく^{注18}。

この草創期のABC Cが、1946年11月から12月にかけて視察・調査旅行を行い、その結果を含めて、1947年3月25日に『ABC C総合報告書』が発表された^{注19}。調査活動を行っていた時期11月にトルーマン大統領の指令が発布され、原子爆弾の人体に及ぼす生物学的・医学的影響について、長期間継続的研究を行う、常設機関になっていった。1947年から遺伝学調査の検討が始まり、ABCCによる本格的な原爆調査、研究調査活動が始まるが、それは厚生省の予防衛生研究所も参加した、「ABC C・予防衛生研究所体制」により取り組まれることになる。

1948年7月以前の時期、日米合同調査団や草

創期のABCCの活動へも長崎医科大学関係者が協力しており、それらに小笠原氏らが動員・関与していたことも十分考えられる。また、小笠原氏が勤務していた時期、採血や血液検査を行っていたという回想があったが、それは草創期のABCCの活動とも関連する。1947年3月から、広島ではニール博士の指導の下、血液学的研究が開始されている。この血液学的研究との関係での採血作業への取り組みとも考えられる。

（2）長崎ABCCと長崎医科大学

小笠原氏の聞き取りから医科大学の医局から同僚とともにABCCに派遣されていた。また土山秀夫の1950年代の「僕が病理学教室に入ってまもなく、君は週に二、三回、ABCCに午前中だけ（行きなさいということになった）」^{注20}という証言をみても、医科大学の医局から“派遣“されることでABCCが人的に支えられていた。このことに典型的に示されているように、医科大学とABCCとがきわめて友好的な関係にあったし、それが比較的長く続く（あるいは現在までも）ことを示している。

医科大学の教授陣の一人として、医科大学の再建に尽力した調来助は、「私の原爆体験とABCCの思い出」として、戦後初期の原爆調査への長崎医科大学の「全面的」協力について記している。

「当時大村海軍病院には、東大の都築教授が十数人の医員と共に滞在して、原爆障害の研究に徒事しておられたが、アメリカの医学者たちも Dr. Henry L. Barnett を団長とする数人の医師や、10月から交替した Dr. Shields Warren たち十数人がいた。私は長崎医大の付属病院長として、これらの研究員たちに全面的に協力し、便宜を図りつつ友好親善に努めたが、その間に生き残りの医師や学生の協力を得て8,000人余りの被爆者を調査し、それを一年がかりで整理して四編の論文を書いた。」^{注21}

戦後直後からの医科大学の復興については、長

崎大学大医学部の『創立150周年記念誌』などに詳しいが、当時の長崎医科大学では、大学本部は片渕の長崎商工会議所、長崎経済専門学校、次いで新興善国民学校に移転され、同国民学校を臨時の附属病院として被爆者の診療を行った。さらに1945年9月に大村市の旧海軍病院で診療・講義を開始したものの、翌46年には諫早の旧佐世保海軍病院分院へ移転、大学本部、附属図書館、医学部、附属専門部などがすべて諫早に置かれることになっている。諫早を附属第二医院、新興善国民学校内の附属病院を第一医院とした。1947年に浦上の附属病院外来本館の修理が始まり、大学本部の一部と基礎医学教室が復帰したが、臨床各教室と附属病院が浦上に復帰するのは、新製の長崎大学発足後の1950年まで待たねばならなかった。

戦後直後の時期の貴重な史料が、調来助「長崎医科大学原爆被災復興日誌」（以下、「復興日誌」と略す）である。関係者の尽力により、『原爆復興50周年記念長崎医科大学原爆記録集』1996年に翻刻されている。「復興日誌」は医科大学関係者の大学などの再建・復興への努力、医療活動の苦闘ぶりを記載しているが、同時に、次々に変わる占領軍や行政機関などの意向に振り回されている様子も見てとれる。「復興日誌」は占領期の原爆調査に積極的に協力している状況も記載しており、医科大学関係者と米軍などとの共同・協力の状況を知りうる点でも貴重な記録である。たとえば、1945年9月29日「都築教授が来て居られ、外に研究団一行、米人研究団等が来た。次でWarern大佐が一場の話をした。それによると原子弾傷は日本と米国学者が共同で研究し、それを各自保存して置く様、後に研究団の名の下に発表することとなろう。」また、10月23日には「ト部君（東大）が話たいことがあると云う。行ってみると、都築教授から昨日古屋野教授に話があったと云う。原子爆弾症の調査の件だ。十一月十日迄に五千人を調査するとの事だ。団長に僕がおされ、ト部君はスタッフとして僕を助ける。学生五十人を使えば一人一日十人

で五千人になる計算だが、どうも困難な仕事だ。調査用紙は東大佐々教授が垂米利加のを参照して作ったのがある」といった記載がある（都築は東京帝国大学の都築正男、古屋野は長崎医科大学の古屋野宏平で学長代理）。

1945年9月からはじまった日米合同調査団による調査に関する動向がわかる。長崎班は、ドクウシイ大佐が中心で、史料中に名前がある、東京帝大のト部美代志教授が担当、大村海軍病院がその活動拠点でもあった。アメリカ海軍の日本技術調査団の団長、シールズ・ウオーレン海軍大佐が長崎の担当である。1946年にABCCの報告書が作成完成されたが、その中に調査団の成果も取り入れられた。

笹本は占領下の原爆調査への政府等の協力を踏まえて「原爆加害国」として、米国と共犯関係にあるとして批判している^{注22}。それを敷衍すれば、長崎医科大学関係者の協力はそうした共犯関係を下支えしたといえるかもしれないが、同時に難しい・厳しい状況の中での選択であったことも考慮しなければならないと考える。

ABCCや米軍への協力としてスタッフを派遣するということは、原爆被災により浦上の全校舎・病院施設が壊滅し医療、教育、研究が分散した状態で行われている状況で、若い医師たちの研究・教育にとっても、ABCCの活動への参加は貴重な機会でもあったことも考慮しなければならないだろう。

また何より、はじめて直面する原爆被害、原爆に起因すると思われる病状にどのように対処していけばよいかわからない状態であり、原爆を投下した相手国の調査であれ、それに協力することで有効な治療方法を探ることができるという面もある。また、調氏の「復興日誌」での記載をみても、医薬品の調達面での占領軍からの供給への期待は大きく、先進的な医薬品が供給されれば、きわめて有用でもあった^{注23}。

（3）長崎ABCCの施設や拠点について

放射線影響研究所の『10年のあゆみ』では、1948（昭和23年）7月1日から長崎ABCCの調査活動が開始され、「長崎ABCCは長崎医科大学附属病院（新興善小学校）内において調査活動を開始した」とし、また、1950（昭和25年）7月1日、「長崎ABCCの施設は、当初、長崎医科大学内に開設されたが、その後、長崎県教育会維持財団所有の会館を賃貸借、移転し本格的業務を開始した」としている。

ところで、後年1960年12月に広島医学会会頭とABCC所長との契約によって、広島医学会『広島医学』に「ABCC欄」がもうけられることになるが、そのABCC欄には、時に長崎ABCCに関する記事も掲載されている。1962年の「広島医学」15巻8号には「長崎ABCCの現況」が掲載されている。そこでも「長崎におけるABCCの活動は、1948年7月下旬、遺伝学的調査を開始したことによって始まった」としている。「遺伝調査」に関してはABCCの部署の一つとして「遺伝学部」があり、「1948年7月下旬、新興善小学校の一室に事務所を開設したのに始まる。以後調査に必要であった妊婦の登録のため、市内2カ所の保健所に一室を借りて業務を行った。この調査は1955年に一応の集結を見た」という。

ABCCが教育会館に移転する前後に長崎ABCCに赴任したJames N Yamazakiは、その遺伝学調査に関わった。後年の回想録^{注24}で次のように述べている。「私が新しい仕事にためらったのは、一つは長崎ではおそらく仕事を一から始めなくてはならないことがわかっていたからだ。委員会は一年前に長崎で調査を開始したばかりで、担当者はみんな市内にばらばらに散らばっていた。本部は漁港の近くの魚市場のところにあった。（略）だから状況としては、研究室も診療所もなく、被爆者の初診を行う施設もないところで、私は現場でただ一人のアメリカ人医師というわけだ。」「そういう事情で、一九四九年十一月の長崎への最初の旅は、

必要な条件をそろえるのが目的だった。何よりも、作業を統括して行う建物と、患者を見る診療所が必要だった」

長崎ABC Cの本格的業務が「遺伝学的調査」からはじまり、そのための拠点が、県教育会館であったのである。

教育会館以前のABC Cがどこに本拠があり活動していたかについては不透明だが、上記の回想やABC C—放影研自身の歴史記述からして、新興善小学校に何らかの関係する施設や事務所があったことは間違いない。同時に、小笠原氏の回想をふまえれば、旧長崎税関にも活動の拠点であったことも間違いない。そして、それは戦後初期に米軍も関与した原爆調査、あるいは草創期のABC Cの活動内容と関わってのことだった。

なお、教育会館への移転決定までの過程については、いまだ検討を要する事項もある。中川利國は広島でのABC Cの本格的・恒久的施設の整備が現在の比治山の施設に定まっていく過程を検討した論文^{注25}のなかで、長崎の施設設備として、「浦上監獄跡地（浦上刑務支所跡地か）の土地賃貸借契約の承認手続きが進められている途中の1949年12月31日に一時中止となり、翌3月1日頃に整備計画が正式にキャンセルされた」と紹介している。要は、一時期だが、現在平和祈念像がある平和公園に整備する計画があったということになる。

また、長崎ABC Cの施設整備は広島の施設との兼ね合いもあった。当事者である長崎ABC Cの後年の年表資料^{注26}では、1949年11月、長崎の研究施設を教育会館内に統合する作業を開始したあと、1950年2月に、「テスマー所長とテイラー副所長」が「米国学士院—学術会議の原爆傷害委員会と米国原子力委員とで編成された特別委員会」で「ABC Cの現状」について報告し、「研究プログラム全体ははじめの計画ほど大規模なものにしない」ことなど、いくつかの決定がなされた。そのなかで、「広島の研究施設の規模と大きさは、じめ

くママ」の計画より大きくする。長崎の研究施設は拡充するがはじめの計画のように広島の施設と同じ規模にすることはしない」（じめくママ」は一字脱字）との決定が行われている。

おわりにかえて～今後の課題

ABC Cの施設整備とも関わる話だが、James N. Yamazakiは、「初期の長崎研究所（その二）」のなかで「長崎大学（長大）医学部とABC Cの間には大変暖かい友好関係が生まれた。（略）医学部の建て替えが始まったばかりの時に、浦上で影浦尚視医学部長と調来助外科教授に初めてお会いした。一番初めに建て替えられる建物にABC Cは部屋を提供してもらうことになり、そこでSam Kimura博士（ABC C臨床部1949-1950年）が白内障の調査をすることになった。」と記している^{注26}。ABC Cの調査研究活動は、長崎大学にかぎったことではないだろうが、大学の医学部や附属病院と組織的にも深い関係を持ち続けていただろう。人的にABC Cを大学医学部が支えていたことも間違いない。そう考えると調査・研究機関としてのABC Cは、大学医学部などと類似の、少なくとも親和的な組織文化を保持していたのではないかと、考える。

なぜ、そうした点を指摘しておきたいかといえ、聞き取りの中でもでてくるがABC Cへの典型的な不満、「調査はしても治療はしない」ということとの関連である。地域の医師会との取り決めがあったのではないかといったうわさや言説もある^{注28}。中川利國は、「間接統治」ゆえに「国民に対する日本政府の基本的な責任を保持させた」なかで、「広島や長崎だけでなく、日本人全体に対して占領軍が直接に医療行為を行うことは、原則として禁止されていた」ゆえに、「占領期におけるABC Cの非治療方針については、ABC Cの主体的な意思決定と言うよりも、占領政策の制約によるものである」と考えられるとの指摘をしている^{注29}。

ABC Cの「非治療方針」の理由をさぐる・検討することも重要ではあるが、同時に、長くそれが是正されてこなかったことを検討する必要があるだろう。中川の指摘どおりだとしても、ではなぜ占領が終結したあと、診察だけでなく治療に踏み出すことを検討しなかったのか、という疑問が生じる。1950年代・60年代には圧倒的に被爆者への医療が量的面でも不足していた時代状況があるが、ABC Cのいくつかの年報を見ても、そうした検討が内部で行われた跡を見いだせない。

客観的な研究課題でもあるが、ABC C改組後の組織である放射線影響研究所に、自組織の歴史的総括として、そのようなことを期待することは望みすぎであろうか。どこまで本格的に検討されたのか、考えて検討していくうえで、医療機関であるというより研究・教育機関であることが優先されがちだと指摘されてきた大学医学部や附属病院との組織文化との類似性や親和性が影響することはないだろうか、ということである。

最後に、長崎も含めたABC Cについては、米国学士院の公文書館に関係者の書簡や報告書、調査資料、写真などがあることが知られている。また、米国テキサス医療センター図書館にも原爆被爆者調査に関与した研究者の資料が保存公開されている。こうしたアメリカの資料^{注30}も検討していくことで、より子細により本格的な分析がすすむだろう。そうしたことで、戦後直後から長崎の被爆者が置かれた状況の解明がすすむとともに、長崎の地域史研究に関しても多大な貢献になるはずである。今後の課題としておきたい。

注

1. 聞き取りは、事前に、以下の項目を聞きたいということをお願いした。
 1. 略歴（学歴など）、2. 原爆投下時にはどちらに、3. ABC Cとの関わりの初め（入所の時期、勤務にいたる経緯など）、4. ABC Cでの業務など（当時の勤務場所や

仕事内容）、5. ABC Cの退職、その後のABC Cとの関係 である。

第1回目当日は、小笠原氏が手書きのメモをつくられており、お願いした項目に沿いながら一通りお話を伺ったあと、後半で補足的な話をお聞きするという進行となった。その内容を組み合わせる形で原稿化を行った。2回目は1回目で紹介があった写真の件を中心に補足する内容をお聞きした。

1回目の聞きとり内容を中心に原稿化し、録音から書き起こし、できるだけ方言の口調もそのまま記載するようにつとめた。また、本文中に（ ）で人名の読みや補充的な内容を記載している。2回目の内容は、ほとんどは（注）に要約的な記載とし（2回目の聞き取りによる）といった記載をした。なお、家族・親族関係など私的な事情もお聞きしたが、本稿では大半を省略した。

なお、文中では小笠原氏以外については、特に後半第二部では論文の慣行にしたがい敬称を略した。

2. 番組は、NHK教育で、2016年8月6日に放送されたE TV特集「54枚の写真～長崎・被爆者を訪ねて～」である。このなかで、当時27歳の研修医だった小笠原正己氏が、ABC Cによる被爆者のケロイドなどの写真撮影に協力したということで取材をうけ証言している。また、2017年12月18日に民放（日本テレビ系）で放送された、NNNドキュメント「ビンの中のお父さん ～被爆者調査 真の狙い」でも取材のなかで、ABC Cで被爆者に血液検査を行っており、「負けたんだから仕方ないと恐ろしがる人をなだめすかしていたこと」が辛かったと語っている。
3. 小笠原薬局については、昭和6年の職業別地図である「佐世保市街町別図」昭和7年に記載がある。平岡昭利編著『地図で見る佐世保』（芸文堂、1997年）の77ページ、元町通に面し

た位置にある。

4. 小笠原氏が勤務していた健康相談所は、健康保険法や簡易生命保険法にもとづく事業として、各地にもうけられた。小笠原氏の談話によれば、無床の外來診療所で、薬剤師である小笠原氏のほか、医者で女医が一人いた。また近所の歯医者とも契約していた。氏の父が、薬剤師は注射もできないし、医者は「先生」と呼ばれるがそうではないことに怒って、医者になるようにいい、医科大への進学を勧めたとの話であった。補習はうけていなかったの、薬剤師として勤務しながら勉強して2年目の受験で合格したという（2回目の聞き取りによる）。

なお、健康相談所は、1937（昭和12）年4月制定の「保健所法」による保健所と類似の機能をもったもので、保健指導を行っていた。保健所は、地方において保健上必要な指導を行う所と規定され全国統一的な基準で設置・整備された。この保健所が健康相談所と連携をとり、昭和19年には健康相談所が保健所に併合される。

5. 小笠原氏は、正式には「戸塚海軍衛生学校」の入学だったと考えられる。海軍軍医学校は、もともとは横須賀にあったが、1943年に戸塚（海軍病院）にも分校が設置されていた。1945年4月に海軍衛生学校令が制定・施行されている。海軍衛生学校には海軍軍医科、薬剤科などがあり、見習尉官の教育機関としても機能した。また衛生兵を育成する機関であった。横須賀鎮守府所属で、戸塚海軍衛生学校があった。「御署名原本・昭和二十年・勅令第一九六号・海軍衛生学校令」アジア歴史資料センター、レファレンスコードA04017730400による。4月1日から7月末までの3ヵ月間、海軍軍医としての教育を受けたらうと考えられる。
6. 父は小笠原長五郎、生母はみよ、兄妹の関係である。父も長崎医科大学の薬専の卒業生だった。いわゆる太平洋戦争が始まったとき、父親

は、12月8日ハワイ真珠湾を攻撃したのをきいて、「東条の馬鹿がアメリカと戦争するなんて」と語っていたような人で、そうしたことを言っていたので、町内会長一町総代を辞めさせられたという（2回目聞き取り）

7. 小笠原氏によると、自宅玄関前での撮影とのこと。足のすねのゲートルも自分では巻かず、お手伝いさんにやってもらっていたような「ぼんぼん」だった、という。ゲートルの巻き方は陸軍と海軍で異なるが、海軍のある佐世保中学のため、海軍式だったという（1回目聞き取り、2回目聞き取り）。
8. 原爆手帳は、被爆者健康手帳のこと。被爆者の「分類」は、直接被爆者の第1号、入市被爆の第2号、死体の処理および救護にあたった者等が第3号、胎児が第4号である（長崎市原爆被爆対策部『原爆被爆者対策事業概要』による）。被爆者健康手帳、健康診断受診者証の法制度や変遷（拡大）などについては、直野章子『原爆体験と戦後体験』（岩波書店、2015年）第二章を参照。
9. 門司の清滝公園の近くにあった。この海軍武官府の医療部につとめ、宿舎に寝泊まりしていた（2回目聞き取り談話）。
10. 『長崎大学医学部 創立150周年記念誌』（150周年記念会編集・刊行、2009年）によると、「昭和21年（1946年）12月1日、横田素一郎先生が第二代第一内科主任教授に就任した」。なお初代は、学長であった角尾晋であり兼任していたが、原爆でなくなった。第二内科の主任教授は、影浦尚視であり、1934年から第3代教授に就任していた。昭和24年7月29日～昭和24年8月31日医学部長の事務取扱、昭和24年8月31日～昭和26年10月1日に医学部長である。長崎大学医学部のWebサイト中の医学科ページ <http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/med/introduction/> 中の「歴代学部長等」による。

11. 2 回目の聞き取り調査の際、ABCC が 1950 年（昭和 25 年）に教育会館に移転すること、また長崎大学医科大学でも、同年に新興善小学校から浦上へ復帰することが重なっている。このため、1952 年（昭和 27 年）に開業であれば、税関などにあつた ABCC か、附属病院に勤務することになるが、そのことに関係した記憶がほとんどなかったため、開業時期については記憶違いかと考え、関係資料の調査を行った。

『長崎市医師会報』38 巻 1 号（第 443 号、2004 年 1 月号）に小笠原氏が寄稿した「65 年の回顧」（「当たり年ばんざい 申年の巻（年順）」では、昭和「22 年医大第一内科入局」「31 年開業」との記載だった。また『昭和二十六年九月末現在 長崎県医師会会員名簿』（長崎県医師会、1951 年）の「長崎市医師会会員」欄には、小笠原正己 長崎市八幡町 10 小笠原医院」とあることから、1951 年時点ではすでに開業していたことは間違いなかった。

念のため長崎県医師会に問い合わせたところ、長崎県医師会への入会は、1949 年 12 月入会、八幡町小笠原医院という記録があるとご教示いただいた。このため、ABCC との移転先の記憶との関係もあり、おそらく 1949 年（昭和 24 年）中には退職・開業準備にはいつていると考え、1949 年中とした。

12. 夫人とのやりとりで、これは、のせさせて、写させてくれということで撮影したというものとのこと。

第 1 回目の聞き取りの際にこうした医科大学時代の写真や ABCC の関係の写真などは「横瀬先生が代表のところ」に寄贈したことがわかった。横瀬昭幸氏が理事長をつとめる長崎平和推進協会、写真資料調査部に寄贈されていた。

2005 年 4 月 2 日長崎新聞に、寄贈したむねの記事（「小笠原さんが平和推進協に写真寄贈

原爆投下翌年の長崎」）が掲載されている。また、前年の 2004 年 9 月 9 日長崎新聞には「医師の小笠原さんが撮影、所有 原爆投下 1 年後の長崎市街地」として取材記事が掲載され、これがきっかけで寄贈にいたっている。同年 2004 年に『長崎県医師会報』第 706 号（2004 年 11 月）に会員寄稿として「被爆から 1 年後のナガサキの写真」があり、いくつかの写真が掲載されている。新聞記事でも紹介されているが、1946 年の長崎くんちや「長崎復興祭」など希少価値のたかい写真も多い。

小笠原氏によると、中学のころからカメラ好きで、カメラは親戚の人から送られたということで、寄贈した戦後の写真も二眼レフカメラを使用して撮影したものとのこと。当時貴重だったフィルムをどこからどうやって入手したのか質問してみたが、覚えていないとの回答だった（第 1 回、第 2 回）。

13. 写真は E T V 特集などでも紹介された。撮影されている状況を撮影したもののようである。ABCC の軍医（と考えられる）が、女性にボードを持たせて撮影をしようとしているところを、小笠原氏が撮影したものである。ボードの部分は筆者が加工した。英字で氏名、「NAGASAKI」が記してあるとともに、「MAY 8 1947」とあることから、撮影日は 1947 年 5 月 8 日であろう。

14. 注 1 2 参照。小笠原正己「被爆から 1 年後のナガサキの写真」『長崎県医師会報』第 706 号によると、解説・写真のキャプションとして、第一内科から、高野九洲男、大坪淳二、小笠原正己、第二内科から古閑達也、村上文也、小柳光久 と記している。

15. 占領初期の原爆調査や ABCC との関わりについては、長崎原爆の戦後史をのこす会『原爆後の七〇年』（同会、2016 年）の 85-87 ページ、110-113 ページに聞き書き証言が掲載されている。本稿で後述する日米合同調査団の調査に

動員され協力した経験やABC Cのでの剖検に関する証言として貴重である。土山秀夫の名は、1952年の名簿に病理部に、Hideo Tsutiyama、Intern という記載がある。名簿はABC Cの年報といえる「SEMI ANNUAL REPORT」(1952年)で、その付録がABC Cの職員録ともいえるものがあり、そこに名前がある。本文で前述したようにこの名簿にも小笠原氏の名前はない。

16. 小笠原氏は長崎ABCCでという記憶であった。ただ、窓の形状(上下に開く形状)や後景の建物から、新興善小学校の可能性も高いと考えている。平和推進協会写真資料調査部会での閲覧時でのアドバイスによる。
17. 新興善小学校では、1957年(昭和32年)から学校医を勤めている(新興善小学校など『百年記念誌』(新興善小学校百年記念事業協賛会、昭和49年)。また、平成20年に叙勲、勲章を受けている。
18. 経緯については、笹本征男『米軍占領下の原爆調査』新幹社、1995年を参照
19. この報告書については、同上『米軍占領下の原爆調査』、120ページから134ページ。「The ABCC General Report of January 1947」で写真を除く全文は、アメリカのWebサイト <http://www.nasonline.org/about-nas/history/archives/collections/abcc-1945-1982.html> で見ることができる。放影研のWebサイト、ライブラリーの中に「歴史に関する資料」があり、そこからもリンクされている。
20. 長崎原爆の戦後史をのこす会『原爆後の七〇年』(同会、2016年)の85-87ページ。
21. 「放影研ニューズレター」14(40周年記念特集号、1988年)、19-20ページによる。
22. 前出注18 笹本著
23. やや後の時期も含むが、こうしたABCCとの「協調」については、宇吹暁『ヒロシマ戦後史』(岩波書店、2014年)25-26ページにも、広島
の動向についての指摘がある。
24. 『原爆の子どもたち』(ルイス・B・フレミングとの共著、プレーン出版、1996年、69ページ。また、放影研のWebサイトに掲載されている同氏の回想でも、「ABCCの医師や看護婦は長崎大学医学部臨床部の臨時施設の一つであった新興善病院(原爆前は小学校であった)の一隅を使用していた。また、ABCCの記録文書は魚市場にあった事務所に保管されていた」「会館を取得したお陰で、その改築前であったけれどもこのような作業を統合することができた。」と同様の回想をしている。
25. 中川利國(広島市公文書館長)「<研究ノート>占領期における広島原爆傷害研究所の整備と広島復興について～米国側資料によるABCCと広島市の交渉過程を中心に～」『広島市公文書館紀要』第29号(2016年6月)、記述の根拠は、注では『目で見える原爆傷害調査委員会一放射線影響研究所40年』財団法人放射線影響研究所、1988年、p12とある。
26. 鎌石昇太郎写「原爆傷害調査委員会(ABC C)年表(一九四五―一九六〇年)」(『長崎談叢』第51輯、1971年7月)。筆者の鎌石昇太郎はABC C勤務の医師で、同年表はABC Cの1968-69年度の年報に掲載された年表の一部を抜粋したものであるという。
27. 注24と同じく放影研のWebサイトに掲載されている氏の回想。
28. こうした医師会との取り決め関係については拙稿「聞き書き 藤田芳子の戦前・戦後」の「補論:長崎ABC Cの紹介と若干の考察」(『平和文化研究』33集(2012年))など参照。また、長崎県医師会『長崎県医師会史』第二卷(同会、1898年)や長崎市医師会史『長崎市医師会史』(同会、1898年)を見たが、ABCCとの関係についての記載は見あたらない。
29. 注25の中川論文
30. 高橋博子「原爆・核実験被害関係資料の現状―

—ABCC・米軍病理学研究所・米原子力委員会」
『歴史評論』739号（2011年）

参考文献

- 1) 直野章子『原爆体験と戦後体験』岩波書店、2015年
- 2) 『長崎大学医学部 創立150周年記念誌』(150周年記念会編集・刊行、2009年)
- 3) 長崎原爆の戦後史をのこす会『原爆後の七〇年』(同会、2016年)
- 4) 笹本征男『米軍占領下の原爆調査』新幹社、1995年参照
- 5) 宇吹暁『ヒロシマ戦後史』(岩波書店、2014年)

参考地図：『新長崎市史』第4巻現代編（2013年）39ページより。新興善小学校は長崎市役所の近くに所在。

謝辞：本稿は、小笠原正己・ひろみ夫妻に聞き取り調査に応じていただいたことにより実現できた。聞き取り調査時、九七歳のご高齢にも関わらず、合計五時間程度お話いただいた。仲介の労をとっていただいた木永朱実氏とともに、改めて感謝の意を記しておきたい。

また、文中の写真については、所蔵者の小笠原正己氏、寄贈先である平和推進協会写真資料調査部会にお世話になった。写真の解釈・意味づけについて、同部会会員のみなさまにご助言いただいた。また長崎県医師会にも資料を紹介いただいたり問い合わせにお答えいただき、記して謝意にかえたい。

補遺：本稿脱稿公開後、2018年5月下旬に小笠原氏の家族よりの申し出があり、55ページ左、28-29行の記載に誤解を生む記載があることが判明した。修正を行うと同時に、関連する注6の記載にも加筆修正を行った（2018年5月28日）。

図1-2 長崎軍政部（司令部）と関係施設概略図

